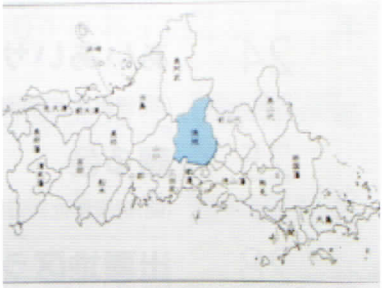
ふるさと再発見
～幕末維新と徳地～

堀伏野に置かれた代官所

さて、今回は徳地堀の伏野に置かれた代官所についてお話します。

写真①は、江戸時代の長州藩18行政区図です。これを宰判といいます。それぞれの宰判に役人（代官といいます。）が藩から派遣され、その役人が勤務をする所を勘場、または代官所といいました。今で言う「総合庁舎」です。当時の勘場は、行政・農林・税務・治安の地方支配の全てを行っていましたので、屋敷の大きさや門、石垣、塀や蔵などは、幕府や藩の権威を示す物として堂々としていたものと想像されます。


①長州18宰判図

さて徳地に置かれた勘場は、堀から島地へ向かう旧道の山手にあります。（写真②、③）「勘場屋敷三反」と地元では言われ、広さや石垣の規模は県内でも有数です。県文書館所蔵の絵図からは、本門や小門、床の間を持つ2つの部屋と約20の部屋、広い中庭と畳敷きの廊下、さらに3つの土蔵などが練り塀で囲まれた建物だったことが伺えます。

徳地では、元治元年（1864年）10月20日に奇兵隊・膺懲隊を受け入れた事件、同年10月26日の萩藩俗論派による代官交代事件、慶応元年（1865年）1月14日の膺懲隊等200名による勘場襲撃と代官追放事件、明治3年（1870年）4月7日の山口藩による脱隊兵鎮圧事件など、勘場を巡って大きな事件が立て続けに起こりました。特に文久3年9月に着任した服部半七郎という代官は、四境戦争後の慶応3年（1867年）1月まで、都合3年間も徳地の代官として倒幕を押し進める長州藩を支えます。徳地では官民挙げて藩を支える体制が出来、その後、倒幕のために多くの若者が戦いに出て行ったと思われます。その他、「花燃ゆ」で登場する吉田松陰の叔父「玉木文之進」や吉田松陰の実兄「杉民治（梅太郎）」も徳地の代官だったことが記録に残っています。

（徳地幕末維新歴史放談の会　代表　山田 文雄）

②伏野勘場石垣

③本門石段跡